

早乙女勝元

小学・中学・高校生



小学・中学・高校生

早乙女勝元



新潮社版



しょうがく ちゅうがく こうこうせい
小学・中学・高校生

一九八五年三月二十五日発行
一九八五年二月二十五日三刷

定価 一二〇〇円

著者 早乙女勝元
きおとめゆもと

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五一―
編集部(03)二六六―五四―

郵便番号 一六二

振替東京四―八〇八

印刷所 東洋印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-308806-0 C0095

©Katsumoto Saotome, 1985, Printed in Japan

目次

オヤジが立たずしては	9
近頃ぶっそうなことばかり	17
怒鳴るつもりじゃなかったが	25
母のルーツをさぐりに行く	33
ほんとに核戦争になるのかな	41
ニワトリだって心身症になる	49
ちよつとさしさわりのある話	57
生きることにけだるくなると……	64
受験は人生の第一ラウンド	71

勉強は親のためではないのだから 79

K君が四階から落ちて、その後 87

先生あした蒸発していきます 95

落ちるか受かるかどっちかで 103

緊張が若さにつながるならば 111

キャンパスに浮かれていると…… 119

中三息子 印税の分け前を迫る 127

B 29搭乗員処刑事件を取材して 135

息づく暇のない受験戦争 143

わが子の目に映ったアンネの隠れ家

151

アンネ一家を守った人びと

158

テストも教科書もない学校へ

166

成人式もフイにした息子の先輩たち

174

三十八年前のおやじの作文

182

高校入試どこ吹く風

190

この春はつと一息は後回し

198

東ドイツ音楽家バンブーラ氏と

206

制服は楽で便利というが

214

おしゃべりが短所で長所で

221

トマホーク接近、息子らは……

228

イラスト入りの息子の手紙

237

はじめのつかぬ親子ばかり

245

お嬢ちゃん、ちよっと

253

十年の歳月を語るアルバム

261

装
画
協
田
和

小学·中学·高校生

オヤジが立たずしては

失職して、今年でちょうど二十五年目になる。思えば遠くへ来たもんだ――、ふりかえると、そんな感慨にも襲われる。

それまで勤務していた神田の某出版社が左前になり、倉庫番の職を追われるようにして、家に閉じこもるようになった時のぼくは、まだ二十代のなかばだった。あれから、情の厚い編集者のおかげで、それこそ恥をかくにふさわしい文字を書き続けてきたが、まだ「作家」という気がしない。世に知られる小説ひとつ書けないで悶々としているうちに、子どもばかり着実に増えて、その経済的、精神的な負担はさらに加重し、「オヤジ」の実感ばかりがひた押しに迫ってくる。「作家」業は、うまくいかなければ途中で道をかえることもできるが、「オヤジ」業ばかりは、どうも、そういうわけにはいかないようだ。

某月某日、例によってデスクに向い、原稿用紙を前にしながら、あまりにも稚拙そのものの文章に愛想をつかし、やるせなく指の爪を噛んでいると、チリチリ……と電話が鳴る。

相手は女性。年頃は不明。なんとかセンターですが、と聞きなれぬ社名を早口でまくしたて、はて、そんな出版社があつたかと思案しているうちに、

「あのウ、お宅に輝^{てる}さんいますね？ 高校二年生の……」

「ええ」

「この前、進学模擬試験をお受けになりましたお子さんですが、あ、お父さんでいらっしやいますか？」

「ええ、まあ」

「当センターは、大学受験のための最優秀の教師をご家庭に斡旋しますが、お宅の輝さん、国公立系を受験されました。でも、あの成績では、ちよつと……どころか……」

「はあ、そうですか」

そんな試験を受けたなんて、知らなかった。図体の割に気の小さい長男のことだ。たぶん腕試しくらいのつもりで、友人たちとでも出かけたのだろう。

「お父さん、あの、お父さん、聞いてらっしやいますか」

思案しているうち、急に語調が高くなった。

「ええ」

「お子さんは、国公立の大学にマトをしぼってらっしやるんですよ。なのに、あの学力でどうなさるおつもりなんですか」

「どうするといつても、まあ……なるようにしかならないんじゃないでしょうか」

「そ、そんなことじゃ、お父さん、輝さんがかわいそうじゃありませんか。今は、猫だつて鉢巻締めて立ち上がったんですよ。お父さんが立たずして、だれが立つんですか」

まるで、いわくありげなゴム製品のセールスマンみたいな口調に圧倒されて、ぼくはしどろもどろになった。

こんな父親では、いくら説得しても話にならないと思ったのだろう、相手は電話代を損したといわんばかりに、退散した。

デスクに戻って、ふたたび2Bの鉛筆を握ってみたが、どうもいけない。耳の底にいまのキンキラ声が残って、まだ響いている。

見も知らぬ女性から、「お父さん、お父さん」と、眠りこけているのを呼びさまされるみたいに通呼されるのも奇態だったが、とどのつまりは叱咤激励されて、それでよい小説を書けというのなら話は別だが、息子のために家庭教師をつけろというわけなのだ。なるようにしかならないだろうといったのが、相手のカンに触れたらしいが、しかし実際のところ、そんなものではないのか。

ぼくは、一人で苦笑したが、やおら2Bの鉛筆を捨てて、またまた席を立った。玄関のチャイムが鳴って、今度は来客である。

「お宅に中一の民子たみこさんがいますね。民子さんの高校受験のために、基礎教科の国語に自信をつけてもらおうと、ハイ、当社では特に民子さんのために、最新版の学習マシーン『国語に強くなる法』を用意してきました」

勝手に玄関口に入って、うむをいわず靴からなにやら百科事典並みの教材を取り出した青年は、背広姿で一応の身なりこそしていたが、靴は埃だらけで踵もすり減り、ひしゃげていた。足もとを見ると、なんだかあわれにもなるのだが、かといっていちいち同情していたら收拾がつかなくなる。

「うちには、民たみはいるが、民子さんというのはいないのですかね」

「は？ ああ、男の子ですか。近頃はどうも男だか女だかわからないような名前が多くなりましてね、へえっへへ……。ま、その民さんが国語に強くなることOKなのです」

「あのう、ぼくは、これでも作家のはしくれなんですけど……」

「旦那、サッカーをおやりに？」

「いや、そのう……ほら、書くほうのです。書いたもの、ほんの少しは、中学や高校の教科書にも掲載されてるんですが」

「あ、早乙女サン……」

青年は、ふいに悲鳴じみた声を上げ、

「わかりました。時代モノの大先生ですね。それじゃ国語のほうは専門家なわけでした、いやア、こりや失礼しました。先生、精力のつくようなお色気モノのほうも、一つ、ま、よろしく」

ぼくは、頭をかきかき尻ごみした。

気のいい青年にはちがいないが、こんなことでいちいち時間をさかれてはたまらない。それにしても輝の場合でもいえることだが、どこでどんな情報を入力するのかしれないが、さまざまな教材業者が受験期の生徒の住所氏名、学年はおろか、時にその子の成績や家庭状況にまで立ち入って通じているのに驚く。その薄気味悪いことといったら、プライバシーもなにもあったものではない。そして、そういう業者が、個別の情報を手に、頻繁に電話で、あるいは直接訪問でアタックしてくるのは、たぶん新学期近しいということもあるのだろう。わが子の実力テストの結果まで突きつけられて、これじゃ無理ですよといわれれば、よほどのへそまがりでもないかぎり、たいていの母親は動揺せざるを得ない。ノイローゼ気味になる方だっていることだろう。

ところが、わが家ではあいにくと、その母親は朝から勇ましく働きに出てしまつて、つまり主

婦はいなくて「主夫」になる。

ほくだって親心がないわけではないから、わが子の成績や進学が気にはなるが、仕事は思うように進まないし、おまけに少々のへそまがりときているから、見ず知らずの他人からわが子のことでいちいち干渉されるのが腹立たしくてならないのだ。いわゆる落ちこぼれたの非行だのが、これだけ社会問題化している折に、ひとの子よりも自分の子のほうでも心配したらどうか。いや、ひとの子を心配してくれる先は商売に結びついていくわけだから、こちらも、それを真に受ける必要はなさそうである。

そこで、またもやチリチリ……と電話が鳴る。今日は、これで何回目だろう。

「あのう、めだかサークルですけれど、こんど父母の会を開くことになりまして、そのお知らせなんです……」

「めだか？」

思わず聞きかえした。

「ええ、お宅の小四の愛ちゃんあいの、スイミングクラブです」

「ははあ、なるほど、めだかね。うちの娘、スイミングになど通ってたんですか」

お恥しい話だが、知らなかった。

スイミングと聞いて夏を連想するのは、もう古いのかもしれない。今は温水とやらで、一年中いつも開放されているのだ。そんな小さなめだかたちのクラブにまで父母の会があるとすると、さしずめなまずかふぐたちの集いか。集いは民主的でいいことだが、それに応じる側はたいいていの場合母親だから、主婦業も忙しくラクではないわけだ。

ところが、ほくは「主夫」であるために、子どもをめぐって常に母親的な対応を迫られること

になる。カミさんにバトンを渡すにしても、窓口はいつもぼく。男であれ女であれ、家にいる者は、なんと不利なことか。

子どものことに振りまわされた感じで、やっとのこと一日が終わる。

夕食時、食卓を中心にして、わが家のにぎわいといったらない。三人の子どもたちはみな育ち盛りとあつて、人一倍腹も減るのか、このひとときばかりはめつたになく意欲的である。一日中教室にいて、餓鬼大将みたいに子どもたちに歌を教えているカミさんだつて、仕事を終えた解放感で、ほつと人心地ついた表情だ。

それなのに、ぼくときたら一向に冴えない。冴えないわけだ。予定した仕事は半分も消化できず、またまた明日へと持ち越しになっている。

「あなた。風邪でも引いたんじゃないの。それとも、まだ二日酔い……」

と、カミさんが屈託のない声で聞いてくださる。その読みの浅さには、とたんに溜息が出る。

「ああ、ぼくも、弁当持つて外に働きに出たいよ。一日中、なんたるこつたい！」

「何があつたのよ」

「何があつたじゃありませんよ。口に出していいえないような、それこそ屁でもないようなことばかりで、主夫の一日は終わるんだ。この労を買われて、ぼくはいまや全国の母親大会から引っぱりだこの弁士サマだ」

「なによ、へんな話……」

くすくすと、肩をすくめて笑う。

すると、カミさんと肩をならべて、せわしなく食事時の愛が、